

シリーズ「グローバル・ジャスティス」第54回

自立に向けての歩み

—あれから21年経ったけれど—

主催：同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科

共催：同志社大学大学院博士課程教育リーディングプログラム

「グローバル・リソース・マネジメント(GRM)」 GRM Lecture Series

日時：2015年7月21日（火）18：30-20：00

会場：同志社大学烏丸キャンパス志高館1階101号室（SK101）

担当：峯陽一（同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科博士後期課程教授）

講師：ガテラ・ルダシングワ・エマニュエル氏/ルダシングワ真美氏

（ムリンディ・ジャパン・ワンラブ・プロジェクト代表）

出席：12人

<講演レポート>

I. 講演会概要

本稿は、同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科と同志社大学大学院博士課程教育リーディングプログラム「グローバル・リソース・マネジメント（GRM）」の共催により行われた、シリーズ「グローバル・ジャスティス」第54回「自立に向けての歩み—あれから21年経ったけれど—」（2015年7月21日実施）の講演報告書である。第54回は、「ムリンディ・ジャパン・ワンラブ・プロジェクト」の設立者である、ガテラ・ルダシングワ・エマニュエル氏とルダシングワ真美氏をお招きし、1994年にルワンダ共和国（以下、ルワンダと表記）において発生したルワンダ虐殺以後、現在に至るまで、同国が如何にして復興の道を進ってきたのか、お二人の活動に即してお話しいただいた。

II. 「ルワンダ」という国

ルワンダは中部アフリカに位置する赤道直下の内陸国で、コンゴ民主共和国、ウガンダ、タンザニア、ブルンジなどと国境を有する共和制国家である。山の斜面を利用した生活空間が営まれ、根菜類、豆類、バナナなどの畑が営まれる。野生動物が多く生息することでも知られており、現在では、同地域にしか生息しない野生のマウンテンゴリラの観察ツアーに世界中から旅行客が募り、観光業などを中心とした経済発展が見込まれる国家である。

一方、ルワンダが進んだ歴史は長く険しいものであったといえる。植民地期には、ドイツ、そしてベルギーにより統治された過去を持つ。ベルギー統治時代には、第二次世界大戦後に学校教育が開始されたものの、その際に、従来ルワンダに暮らす人々の間で共有されてこなかった「民族」や「身分」の概念が持ち込まれ、職業や容姿によって人々が分断されていく契機となった（これが後の紛争の遠因となったとのこと）。ベルギーによるルワンダ統治の時代、ルワンダ国民は身分証明書の発行により各々が分断され、公教育の現場においてさえ、試験の結果ではなく、出身民族の身分によって進級の可否が決定されたという。こうして宗主国によりもたらされた「民族」や「身分」により分断された国民は、やがて対立を深め、1994年に発生する虐殺へとつながる紛争へと突き進んでいく。

III. ジェノサイドの経験から

上述の歴史的背景により分断された国民は、「民族」や「身分」によりもたらされる苦しみの中で互いに対立を深め、やがて 1994 のルワンダ虐殺の時を迎える。同年の虐殺は、100 万人の人々の命を短期間の間に奪い、80 万人に及ぶ人々に障害を抱えながら生きていくことを余儀なくさせる結果となり、同国に深刻な人道の危機をもたらすこととなった。

ルワンダ虐殺により発生した、多くの難民の人々に人道上の危機が迫っていたこともあり、虐殺後のルワンダには国際社会の支援の手が届けられるようになった。紛争、虐殺の間に破壊された基礎インフラの整備、難民や貧困に苦しむ人々への食糧配布やキャンプの整備、生計手段の確立等の支援が、多様なドナーにより順次行われていった。国際社会により、虐殺に関与した人間を裁く法廷も設置され、復興の道程が形成されていった。

国際社会による支援により復興の道を歩むルワンダであるが、その復興の原資となるものは、ルワンダ国民各々が有する、地域社会の再建に向けた強い意志と、同国の将来における平和への希求に他ならない。ガテラ氏は講演の中で、過去の植民地政権下に階層化されたルワンダであるが、現在は「一つのルワンダ」として、国民一人一人が有する可能性を生かしつつ、国民が一体となって復興に向かって歩み始めていると述べられた。同氏は、虐殺を生き延びた経験に基づき、仕返しをせず、法によってのみ虐殺を遂行した者を裁く必要があること、「外部」により作られたもの（身分証）によりもたらされた悲劇により、殺した側も、殺された者の遺族の側も、両方が悲しみの中にあることを強調した。現在では、身分証作成上必要な情報を除き、「民族」を示すものが身分証に載ることはなく、ルワンダは「民族」ではなく、「ルワンダ人」として再出発することに成功しているという。国内での地域使用言語の際などが民族統一の課題として残るとされるものの、虐殺に加担した人々、虐殺の対象になり命を落とした人々の遺族、皆が経験を語り合いながら、事実を後世に伝え、将来の平和を希求する姿が、今のルワンダにはあるとのことである。

IV. 争いの果ての課題と向き合う—ムリンディ・ジャパン・ワンラブ・プロジェクトの活動

虐殺からの復興の道を歩むルワンダであるが、多くの課題も残されている。そのうちの一つが、上述した、虐殺の間に傷つけられ障害を抱えることとなった 80 万人の人々へのケアである。ルワンダには、虐殺を生き延びながらもその後遺症により苦しみ、義足を必要とする人々が大勢暮らす。そうした人々の多くは金銭的余裕がないため杖や装具を持つことが出来ず、復興の道を歩む社会の中において非常に不便な生活を強いられている存在であるとされる。ルダシングワ御夫妻は、そうした人々に寄り添いつつ、傷ついた人々が社会に復帰し、安定した生計手段の下、ルワンダの未来を生きていくことが出来るようにと、ムリンディ・ジャパン・ワンラブ・プロジェクトを設立された。同団体は (1) 義足の提供により“肉体的に”立ち上がらせること (2) 雇用創出のための技術教育 (3) スポーツを通じ障害者間の交流の機会を創ること、を具体的な行動目標として掲げ、ルワンダやブルンジの政府、ならびに各種ドナーとの協働の下、義足を無償提供し支援を続けてきた。義足提供の情報はラジオによって提供され、義足提供と歩行練習を一つのプログラムとして設定し、性別、年齢、症状に合わせた対応を行っている。義足の材料は主に国外から運ばれ、日本からも不必要な義足を提供してもらい、ルワンダやブルンジでの支援現場において活用しているとのことである。

活動に際して直面した困難・課題として、子供への義足提供が挙げられた。子供は身体の成長速度が速いため義足を作り直しながら生活していくことが求められるが、資金面での課題から繰り返し義足を提供することが出来ないため、必然的に後回しにせざるを得ないとのことである。そうした場合には、義足の代替品として杖を提供し対応するとのことである。また義足の提供は基本的には無償支援の形で行われるが、子供のための義足提供を強く望み、代金を支払うことで義足を制作してもらうことを望む家族のケースも挙げられた。そうした際に得た代金は、団体の活動運営のための資金として有効に活用される。

V. ルワンダの未来へ

様々な困難に直面しながら団体の運営を続けられてきたルダシングワ御夫妻は、義足の提供以外にも、様々なアクティビティの機会を、障害を抱える人々に提供している。一つは、コンプレックス（将来に希望が持てない、障害を抱えるようになって出来なくなったことが増えたなど）を抱える人々に、足を失っても尚、出来ることがあることを教えるために、スポーツの機会を提供することである。団体ではシッティング・バレーボールなど、多様なスポーツの機会を提供し、シドニーで行われたパラリンピックでは、団体の出身者の一人が水泳の選手として出場した。以後、継続的に団体の出身者が五輪に出場しているとのことである。またガテラ氏は、様々な国際大会に出場して実績を重ね、いつしか障害を抱える人々の間には、“自らの手で” スポーツの機会を生かし、生活の場を切り拓いてきたという“誇り”が育まれるようになっていたと述べられた。今後はガテラ氏自身も車椅子スポーツなどに参加し、団体の運営だけでなく、自らも障害を抱える人々とともにスポーツの機会を楽しんでいきたいとのことである。また、ムリンディ・ジャパン・ワンラブ・プロジェクトでは、障害を抱える人々の自立のため、国際協力機構（JICA）や東北福祉大学と協働し、人に雇われるだけではなく、共同体の創造により自らの手で安定収入を得られるようにと、障害を抱える人々を集めてパソコン教室を無料で運営している。こうした活動が障害を抱える人々の経済的自立につながり、生活における新たな可能性に導かれていくことが強く期待される。

最後に、お二人はこれまでの活動を支援し見守ってきた多くの人々に向けて感謝の言葉を述べられるとともに、諸側面における、より一層の支援の必要性をお話しされた。今後は、将来においてムリンディ・ジャパン・ワンラブ・プロジェクトの運営の仕事を委ねることが出来る人物を育てていくとともに、義足制作技師の教育のための、日本をはじめとした国際社会とのさらなる連携を模索していくとのことである。ガテラ氏は真美氏と支援者の方々への感謝を述べるとともに、自らのやりたいこと、想いを積極的に多くの人々に訴えかけていくことの重要性を講演の参加者に説き、ルワンダとブルンジでこれまでに3000人の人々に義足を作り、12人の義足制作技師を育ててきた実績を誇り高くお話しされた。お二人とも、今後沢山人々にルワンダを訪れていただき、ルワンダの“今”、そしてルワンダの未来が若い人々により創造されていく姿を見ていただきたいと述べられた。

<質疑応答記録>

質問 (1) : 義足を作成する技術者の養成のため、どのような協力関係を築いているか？

応答 (1) : ルワンダで数年勉強→神奈川県で研修員受け入れ（神奈川県が一定の経費を

負担)。勉強後は、3年間はルダシングワ氏のプロジェクトで働くことが必要。

これまでに8人、神奈川県での研修を経験。後に3人が独立し活動している。

質問(2)：ルワンダで義足を必要としている人々の人数は？

応答(2)：80万人ほど。詳細な人数については現在統計データを調査中。

質問(3)：義足提供後パソコン教室に通って学習した人々のためにはどのような活動を？

応答(3)：パソコン教室卒業後、パソコンとプリンターを無償提供。

学習終了後のフォローアップ支援が特に必要であると理解している。

文責：大橋佑（同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科）